にれのき

2009 Autumn

http://elm-ac.jp/

今を生きる若者に向けて

矢沢・中塚が法政大学でゲスト講義

エルムの大きな目標と活動に驚きと共感の声

法政大学多摩キャンパス大教室Ｂにて講義する矢沢（左）・中塚（右）

09年7月9日、法政大学社会学部の平塚眞樹先生の授業に、矢沢宏之（エルムアカデミー代表）と中塚史行（ＮＰＯ法人教育サポートセンターＮＩＲＥ代表）が、ゲスト講師として招かれました。

講義のテーマは、子どもからおとなへの「わたり」に立ち会い、関わり、支援するエルムで働いてきた実践とその歴史でした。

約２００名の学生を前に、映像によるエルムアカデミーの教育実践を紹介、エルムアカデミー創立（84年）の経緯、そして、エルムアカデミーの理念を掲げた『エルム憲章』（89年制定）に基づき、不登校の子どもたちのサポートをおこない、その後、特別な教育的ニーズをもつ子どもたちの発達を保障していくために、新たな組織「教育サポートセンターＮＩＲＥ」を設立したこと、そして、創立20周年でまとめた「地域に生まれ、地域で育ち、地域に生き、地域を創る」という新たな方向性に基づき、若者の雇用の創出という目標を実現させるために「麺処はるにれ」（07年）をオープンさせたこと、若者の相談窓口のため「厚労省・若者サポートステーション」（09年）に参入したことなど、現在のエルムグループの概要について話しました。

エルムが、子どもたちにとって地域における自立の依拠点としての「学びの場」「居場所」というこれまでの位置づけから、もう一歩進んで「大人への『わたり』」をめざし、青年にとっての「働く場」「再教育の場」という役割も果たそうとして発展していることが、まさに自分の就職等の進路問題を抱える学生たちにとっては、自身の問題意識や平塚先生の授業とも重なり、新鮮な驚きや発見があったようでした。

＊「教育サポートセンターＮＩＲＥ」設立については、「にれのき」（05年月1号）、「麺処はるにれ」設立については「にれのき」（08年1月号）、「若者サポートステーション事業」参入については、「にれのき」（09年夏月号）に詳しく載っています。ＨＰからご覧ください。

～受講生の感想から～

大人へのわたりをサポートする場所　　高田 綾 さん

今、子どもたちにとって勉強する場は「塾」である。私は中学３年生から塾に通い始めたが、同級生の子のほとんどが塾に通っていた。塾は第二の学校である。私は個人経営の少人数制の塾であったが、多くの子は大手の大人数制のクラスであったので、同じ塾同士の子達は、塾の先生や他校の友達について話していて、その話題についていけなかったことを思い出した。

エルムアカデミーは学びの場だけではなく、人生について、学ぶことについて考える場としても機能しており、非常に面倒見の良い学校であると感じた。進学を目標として掲げるのではなく、不登校の子、集団が苦手な子などなど学校においてけぼりの子たちの居場所としての塾は新しく、子どもたちにとって必要な場であると感じた。

塾というカテゴリーを超えて、生徒の人権を尊重し、勉強だけではなく悩みの相談を親や学校の先生ではない第三の立場にある信頼できる大人たちが近くにいてくれることは心強いと思った。小学校から高校生まで面倒を見てくれる塾はあるが、就職などにまで相談にのってくれる塾はエルムアカデミーだけではないだろうか。

子どもにとって、学校と家庭が生活の全てであり、そのどちらかでつまづいてしまったら、心に大きな負荷がかかる。本来そういった心のケアは学校と家庭によってなされるべきだが、その役割はあまり果たされていないことが多い。OB・OG の人々がエルムアカデミーのイベントを支え、教師も生徒と共に成長でき、落ちこぼれてしまった生徒を決しておいてけぼりにしない。

悩みを抱える子達にとって、絶対的に信頼できる場所があれば、じっくりと自分について将来について考えていければ、それを乗り越えることができる。子どもから大人へのわたりを絶対的にサポートしてくれる場があることは生徒一人ひとりに 100%プラスの影響を人生に与えているはずだ。

お二方の話しぶりはすがすがしくて、私の価値観にもよい刺激を与えてもらった。

人と関わる機会を提供していく場所　　酒井 由果 さん

私は現在大学二年生で、就職を意識することも度々ありますが、就職活動中の先輩や友人を見ているといつも不安に思います。会社に対する不安や不満をぶつける場もありません。現代、「生きづらさ」を感じている人は大勢いると思います。もちろん、その重荷に耐えられず、不登校になったり非行に走ったり、会社を辞めてニートをしている友人は、私の周りにもいます。でも、彼らに対して、私はどこか他人事のように思ってしまいました。「これは、彼ら自身の責任である」と。しかし、今回矢沢さんと中塚さんの講義で、若者のことを一生懸命に考え、事業を立ち上げて活動しているということを直に聞き、自分の考え方は間違っているのだと気づくことができました。社会や人から離れていった彼らが悪いのではなく、この社会の「生きづらさ」がそうさせたのだと思いました。

そして、矢沢さんがおっしゃっていたように、「人との関わり」こそが、彼らの復帰に不可欠で、とても重要なものであり、エルムアカデミーでは、その機会を提供し、人と関わる楽しさや友達をつくったり、社会を知ることから始めようと若者に呼びかけているのだと感じました。そんな目的を根底に、地域若者サポートステーションの開設や働く場を与えるためにラーメン屋を始める、という活動につながっていくプロセスを知り、その支援の大きさに驚きました。

このような就職訓練は、学校の間接的な教育では得られないとても貴重な経験だと思います。

後期近代では、前期近代とは違う新しい社会を展開していて、若者もそれに対応した生き方に変容しています。そんな未知の世界で、若者のために新しい支援を次々と提供していく大人がいてくれるという事実に安心しました。さらに、「子どもたちに教えると同時に私たちも教えられている」という言葉が印象に残りました。私も、周りのやる気をなくしている友人等、まず身近な存在のことを理解し、力になりたいと思いました。

(受講生の名前は仮名です)

デンマーク・ドイツの「生産学校」を視察

矢沢 宏之

デンマーク ユースアー生産学校玄関

09年8月31日から9月7日まで、元都立大学の大串隆吉先生の引率でデンマーク・ドイツの生産学校の視察ツアーに参加しました。このツアーの参加者は私を含めて15名。その中には内閣府で日本の若者政策づくりをしている宮本みち子（放送大学）さんら研究者や三鷹などで若者の自立を支えてる佐藤洋作さんらスタッフなどがいました。

視察したところはデンマークではコースアー生産学校、その行政機関であるスレーイエルセ市役所とその青年教育センター（U2）事務所。（この市はコペンハーゲンから車でおよそ2時間、人口6万人）ドイツではブレーメン郊外にあるブレーマーハーヘン生産学校です。

生産学校とは

生産学校はいわゆる正規の教育コースをドロップアウトした若者の受け皿として、およそ15歳から25歳の若者のための学校です。ここでは実際の授業の中で生産活動に従事し、学ぶ意味や労働の意味を確認し、次のステップ（就労や復学）に進む仕組みになっています。また、技術や進路を裏付ける語学や計算などの学力の保証もあわせておこなっています。デンマークでは25年前にコースアー生産学校ができ、全国に２００以上の生産学校があります。また、生産学校法という法律で法的にも学校として認められています。そして、その流れでお隣の国のドイツにも生産学校が生まれ、北欧諸国にも同じような学校が生まれています。

どのような教育内容か

どちらの国でも、木工・塗装・鉄工・デザイン・ＰＣ・経理・調理・被服・音楽など様々なプロジェクトがあり、それに参加します。各プロジェクトには職業指導ができる教師が1名配置され生徒は10名です。デンマークでは随時入学・卒業の形態で、期間は短くて3ヶ月長くても1年（必要ならば伸ばすことも可能）です。各生徒はプロジェクトを選んで入学しますが、自分に合わないと感じたら、また別のプロジェクトを選択することも可能です。もちろん、入学金を含めて学費は無償ですし、奨学金をもらうこともできます。

例えば、コースアーの生産学校の鉄工のプロジェクトでは、大きな鉄板でできた手信号

鉄工プロジェクト

木工プロジェクト

経理プロジェクト

音楽プロジェクト

をデンマーク国鉄から受注して販売したり、家庭用の堅牢なバーベキューコンロやかわいらしい水差しや植木鉢を生産販売しています。また、音楽のプロジェクトでは自分たちで作った歌を小学校や地域フェスティバルで披露します。

特筆すべきところは、そこで生産し販売したものは、生徒たちの賃金として支払われることです。その支払いに関しても経理のプロジェクトが仕入れや労働時間を計算し、賃金を算定し支払うようになっています。自分たちが生産したもので賃金を受け取るという一連の中で、社会に参加しながら自己肯定感も育成していく仕組みができています。

どのようにつなげていくか

このような生産学校設立の背景には、もちろんヨーロッパ特有の移民問題も絡んでいます。しかし、いわゆる座学中心のアカデミックな学校についていけない若者たちは先進国の大きな問題です。社会保障や治安対策の側面も併せ持っているものです。

デンマークでは中学卒業後の後期中等教育の卒業達成率を現在の80％から95％にあげようとしています。そのためには、中学以前の段階で不登校になっている若者や高校・職業学校で中退している若者に行政が支援をしています。それが、青年教育センター、U2といわれているものです。学校に所属をしている段階から学校と連携し若者の進路をサポートしていきます。そして、若者が学校を離れてからもカウンセリングや訪問を通して、若者の進路形成を援助していきます。その紹介で生産学校にたどりつく若者も少なくありません。

日本でも

日本においても職業と教育をゆるやかに結びつけ、若者の自信とやる気を回復する施設（学校）が必要になっていると実感します。特に、不登校や中退などの経験者は、仲間と結びつくことが難しく、学ぶ意欲や働く意欲が減退しています。そのためにも普通の高校よりも敷居の低いこのような学校が必要なのです。

また、学校から離れてしまった若者たちにとって進路形成を援助する青年教育センターのような機関も必要になっています。もちろん社会保障や文化を含めて大きな違いはありますが、社会全体が若者を守り育てていくシステムはこれからの日本全体の進路を考えていく上でも大きな課題になっていくでしょう。今後、デンマークを中心とした生産学校協会とわたしたちとの交流もはかられていく予定です。エルムもこれに大いに参画していきたいと思っています。

（詳しく知りたい方は、雑誌「教育」2009年10月号　大串隆吉「若者に職業訓練と職業を―デンマークからドイツへ―」をお読みください）

合宿で学んだ多くのことを、「これから」に活かしていきたい

エルム中学部では、毎年9月の終わりに「前期まとめの会」を行ないます。ここでは、さまざまな感動や成長があった夏の合宿を振り返り、2学期、学年末へ向けての一人ひとりの目標やクラス後期目標を確認しあいます。

9月の終わりといえば、長い夏休みが終わり、学校がスタートしたところ。さまざまな現実との葛藤が起こる時期でもあります。実際今年も「学校に行きたくない」「勉強したくない」「友だち関係に悩んでいる」など、さまざまな相談がエルムに寄せられました。

こういう時期に、お互いの悩みや不安を正直に出し合い、「悩みの原因は何か?」「不安の原因は何か?」ということについて、仲間と語り合うことは、思春期の子どもたちにとって、とても大切だと考えています。

「前期まとめの会」へ向けて、各クラスでは、一人ひとりの思いを出し合うだけでなく、「これから」についても話し合います。一人ひとりの抱える問題を解決するためには、やっぱり「支えあう仲間」が必要であることが、子どもたちも改めて気づきます。

こうしたクラスの話し合いは、「クラス目標」としてまとめられ、発表されます。

「会」当日は、中1から中3まで、生徒と教員が全員集合します。総勢約60人。狭い教室には熱気があふれます。

最初に、子どもたちも楽しみにしていた、夏合宿のビデオを上映します。笑いあり、涙ありの夏合宿を思い出し、少し忘れかけていた「ありのままの自分」をもう一度振り返ることができたのではないでしょうか。

その後、各団ごと、学年ごとに「クラス目標」を発表します。自分たちのどういう思いが詰まっているのか、みんなの前で発表します。

そしてメインは中学3年生の決意表明。中学3年生にとって、「これから」は、「勉強」と「進路」の壁に、本格的にぶつかっていくシーズンとなります。中学3年生一人ひとりが、今の自分をしっかり見つめ直し、これから何と向き合っていくのか、真剣な思いを「決意表明」として語ります。

「本音を語る」というのは、本当に勇気にいることです。今年の「会」も子どもたちは真剣に取り組みました。ここで出された子どもたちの「願い」に応えながら、子どもたちと共に進路を切り拓いていきたいと思います。

各クラスのクラス後期目標

1 年	メリハリをつけて、早く学び合い、教え合う
2A	① 誰かの悪口・陰口を言ったり、みんなを傷つけないクラス ② みんなの思ってることを勇気をもって言い合うクラス ③ 一人ひとりのことを大切に思い、それぞれの目標を意識しあって叶うように助け合えるクラス ④ 勉強にはけじめをつけて集中し、教え合えるクラス ⑤ にぎやかで笑顔のたえないクラス ⑥ お互いに頑張ったことをほめ合えて、心から「ありがとう」と言い合えるクラス。
2B	2009 年 11 月 3 日現在、話し合い中 (インフルエンザでクラス全員が揃わなかったため)
3A	一人は全員のために、全員は一人のために
3B	信頼し、お互いの思いを大事にし、それぞれの進路を応援し合えるクラス

中学3年生の決意表明より

3A　番場 颯斗

俺が団長になった理由は、サボり癖があり、すぐに諦めるから。中途半端な気持ちだった俺は、合宿に行って生まれ変わる気持ちで心を入れ替えた。そして合宿で団長として成功させることができた。

今一番不安に思っていることは進路のことだ。夏休みが終わって、学校の英語や数学のテストなどの結果がとても悪かった。ショックだった。俺は、合宿でこういうことを変えたかったのに、学校へ行ったら生まれ変わっていなかった。合宿に行ったのも、全て無駄と思ってしまった。エルムでは変われたけど、学校では何も変われてなかった。このままエルムにいて、高校に入ることができるかとても不安になった。他の塾に入った方がいいとも考えた。でも、このままエルムをやめたら、一生成長できないと思った。逃げるような気がしたから、このまま頑張っていきたいと思っている。

まだ行きたい高校や進路は決まってないけど、これから少しずつ自分のことなど、自分に合った高校を見つけていきたいと思う。これから自分なりにエルムを活用して、自分なりに頑張っていきたいと思う。だから、勉強にも逃げないで頑張っていきたい。

3B　中條 菜々美

合宿を通してつかんだことは、仲間の大切さと行動することの大切さ。仲間に支えられて思いが言えたし、口だけじゃなく、行動することで刺激を与えられて、気持ちが変わった。行動することはすごいって実感した。

うちは結構めんどくさがりだってことが分かった。めんどくさいことは、言い訳して逃げてた。きっと進路は今までで一番めんどくさいものになると思うから、いろいろ言い訳していってしまうって、現時点でも思う。でも言い訳しまくってたら、仲間に最低な態度をとることになる。だからうちは逃げたくない。逃げたら絶対何も変わらない。「めんどくさい」って思っても、壁をぶち壊して進んでいきたい。

今のエルムのクラスはすっごく楽しい。夏前とか夏の初めの方は結構違和感があったんだけど、今はほとんどない。夏前に比べて本当にみんなすごく変わったと思う。

合宿で団長は終わったものだと思っていたけど、うちはずっと団長でいたい。だからまた、みんなとぶつかっていきたいと思っている。これからのクラスは「みんなで」っていう意識を強く持てるクラスにしたい。

09年中高合同合宿報告―自由の森学園と手を取り合って―

8月6日～13日、エルム中高合同合宿が行われました。開催地は埼玉県飯能市にある私立自由の森学園。学園の学生寮に宿泊、教室で授業、グラウンドでスポーツ大会、多目的室で集会・劇という最高の環境が整った場所での合宿となりました。

学生寮は自由の森学園の保護者の方々の手によって改装されました。これは「自森再生プロジェクト」という壮大な計画の一部として取り組まれました。壁紙の張替えやペンキの塗装、高圧洗浄機を使っての汚れ落しなど、学生寮の細部に至るまで修繕をしていただきました。そのおかげで気持ちよく1週間を過ごせました。（自森再生プロジェクトについては http://d.hatena.ne.jp/jimorisaisei/ をご覧下さい）

また、高校生は自由の森学園高等部の鬼沢校長先生に間伐の授業をしていただきました。初めての経験で高校生たちは疲れきっていましたが、それ以上に充実感や楽しさを感じていました。

今年の合宿は、エルムの保護者の方々のご協力だけでなく、自由の森学園の教職員・保護者の方々のご協力により成功をおさめることができました。

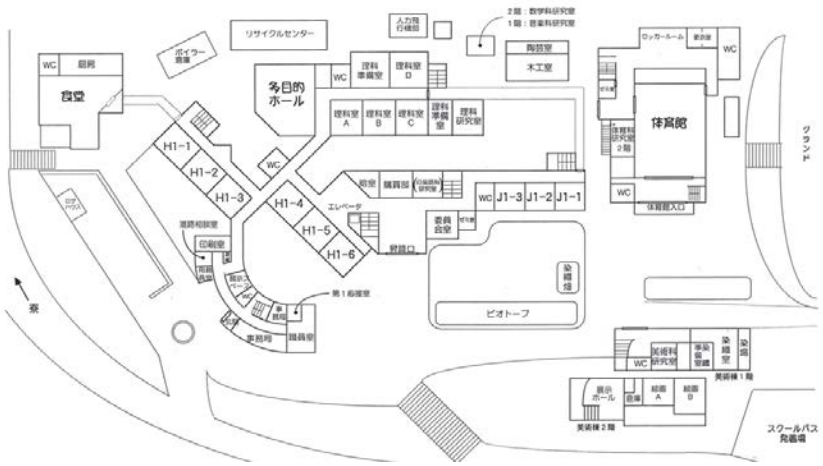
今後も、合宿だけではなく、さまざまな形で自由の森学園とエルムは共に協力し合っていきたいと思います。

学生寮

学生寮内

食堂

多目的ホール



美術棟展示ホール

グラウンド